

## **Social Collaboration Activities For Students in Art and Design University**

### Case Study of Kyoto Seika University's Social Practice Skills Development Program

MINAMI Ryota  
XIA Shiming  
NAKAI Sakiko

---

This paper reports a survey finding in the 2022 2Q Intensive Program. The participants were 175 university students who participated in the program. The results show that the participants tend to take a more challenging internship program after completing a short domestic program, which is considered relatively easy. Second, the participants plan to take different courses under the same program. Finally, the statistical results show no significant differences in personality traits other than extraversion (overseas SP > domestic SP) and openness (industry-academia-government collaboration PBL > university collaboration). The sense of fulfillment in university life was also significantly higher for participants in the PBL program than for participants in the other programs (e.g., the domestic short program). A more precise analysis will be needed in the future to get a complete picture.

# 芸術・デザイン系大学における社会連携活動の試み

## —京都精華大学社会実践力育成プログラムの事例—

南 了 太<sup>1</sup> MINAMI Ryota  
 夏 世 明<sup>1</sup> XIA Shiming  
 中 井 咲貴子<sup>1</sup> NAKAI Sakiko

### はじめに

社会が大きく変化する中で、社会との連携が大学教育においても求められている。これまで、大学での学びの多くは座学で専門スキルや教養を身につけることが中心であったが、今後はその能力に加え、自らが積極的に自治体や企業、地域社会の問題に関心を持ち、在学期間中から社会と関わることが求められている。このことを受け、京都精華大学では、2021年度より全学共通教育科目の中に「社会実践力育成プログラム」が構築された。本プログラムは地域や企業等との連携プログラムを60近く用意し、社会実践力を身につけることを目指すとともに、在学生の夢に近づける機会を提供するものである。

今年度(2022年度)は選択科目として、2Q集中期間に33プログラム(730名定員)が用意された。抽選科目に該当する5つのプログラム<sup>2</sup>(大学連携プログラム、国内ショートプログラム、海外ショートプログラム、産学公連携PBLプログラム、インターンシップ)に対して、759件の申し込みがあり、結果として421名<sup>3</sup>の履修登録があった。定員に対して約60%の履修登録があり、昨年度(2021年度)の30%を大きく上回る結果である。これにより、社会と関わり、社会的な実践に参加したいという在学生在が本学に多いと言えよう。

本プログラムの履修者を対象に、直接的教育効果(社会人基礎力)および間接的波及効果(大学生活充実度)に主な焦点を当てて、プログラム参加前(事前)<sup>4</sup>とプログラム参加後(事後)という2時点でアンケート調査<sup>5</sup>を実施した。本稿は事前アンケート調査で収集されたデータを用いて、以下の3つの課

題を中心に分析を行い、報告をまとめた。

1. アンケート回答者の基本属性
2. 最も関心があるプログラム別の学生特性
3. 今後のプログラム企画への示唆

### 1. アンケート回答者の基本属性

本アンケート回答者は合計175名で、男性学生が41名で女性学生が126名で、性別不特定の学生が8名である。最終履修者(人数実数値)での回収率が約54%である。下記表1. 学年別における履修者と回答者の割合、表2. 所属学部別における履修者と回答者の割合、および表3. 科目プログラムにおける履修者と回答者の割合から、本アンケートのサンプルは履修者全体をかなりの程度で反映できて代表性があると言えよう。

表1. 学年別における履修者と回答者の割合

割合/学年	1年生	2年生	3年生	4年生以上	合計
履修者全体割合(%)	48.3	39.4	8.3	4.0	100
回答者全体割合(%)	55.4	33.1	6.9	4.6	100

表2. 所属学部別における履修者と回答者の割合

割合/所属学部	PC	人文	メディア表現	国際文化	芸術	デザイン	マンガ	合計
履修者全体割合(%)	0.6	1.5	13.8	13.2	10.5	25.8	34.5	100
回答者全体割合(%)	1.7	4.6	12.6	10.9	9.7	30.3	30.3	100

表3. 科目プログラムにおける履修者と回答者の割合

割合/ プログラム	大学 連携	インターン	海外 SP	国内 SP	PBL	合計
履修者 全体割合 (%)	2.2	5.3	10.6	77.2	5.9	100
回答者 全体割合 (%)	5.6	2.2	8.9	72.8	10.6	100

下記表4. は今回の社会実践力育成プログラムの情報入手ルートを問う質問の結果を示している。複数回答のため、回答者人数ベースで見ると、約半数の回答者はセイカーポータルと教員からの紹介のどちらか（または両方）から情報を得たことが分かる。

表5. は今回最も関心のあるプログラムと、次回履修希望プログラムについて結果をまとめた表である。今回最も関心が高かったプログラムは国内ショートプログラムで、次に海外ショートプログラム、3番目はインターンシップである。しかし、次回履修する場合、インターンシップが最も割合が高く、その次に海外ショートプログラムで、国内ショートプログラムは3番目である。この対比から、国内ショートプログラムを経験したのち、企業・公的団体でのインターンシップ実践へ挑戦したいという傾向が見えそうである。そして、紙面の幅で詳細を控えるが、最も関心のあるプログラム別にみると、今回の最も関心あるプログラムと次回履修希望プログラムが重なることも分かる。例えば、最も関心のあるプログラムにおいて、海外ショートプログラムと回答した者の67%、国内ショートプログラムと回答した者の30%は次回履修希望プログラムが同じプログラムである（例：今年度参加した国内プログラムを次年度も希望など）。

表4. 今回の社会実践力育成プログラムの情報入手ルートの割合（回答者人数ベース）

ポータル	教員 からの 紹介	学内 ポスター	Twitter	社会実践 ホーム ページ	在校生 からの 紹介
54.3% (95人)	49.1% (86人)	18.3% (32人)	0.0%	8.0% (14人)	2.3% (4人)

表5. 最も関心のあるプログラムと次回履修希望のプログラムの割合

	大学 連携	インターン	海外 SP	国内 SP	PBL	無	合計
最も 関心割合 (%)	5.4	18	26.9	42.5	7.2	0.0	100
次回 希望割合 (%)	11.2	33.1	21.5	19.0	7.0	8.3	100

下記表6. は今回の履修プログラムを通して身につけたい力という学習効果に関する期待を分析した表である。複数回答のため、回答者人数ベースで見ると、「表現力」が最も期待されていることが分かる。これは芸術・デザイン系大学という本学の特徴を反映しているとも言えよう。その他の3つ（解決力、提案力、調査力）も僅差ではあるが、約4割の学生に期待されていることが分かる。大学生が社会に出る時に、コアな社会人基礎力がますます求められてくると言われているなか、このような力を涵養するプログラムの提供および在学生の更なる意識喚起が必要になってくることが推察できる。表7. は今回の履修プログラムに登録したきっかけを回答者人数ベースでまとめた表である。登録したきっかけとして、「プログラムの内容が面白そうだから」の割合が最も高く、その次は「早いうちに社会と関わりたいから」で、3番目は「単位が欲しい」である。特に、「プログラムの内容が面白そうだから」と「早いうちに社会と関わりたいから」から、今回の履修生に能動性と積極性が見られ、ポジティブに社会実践力育成プログラムに参加していることが分かる。

表6. 今回のプログラム履修で身につけたい力の割合（回答者人数ベース）

	解決力	提案力	調査力	表現力
学習効果期待 割合 (%)	42.9	38.3	38.3	55.4

表7. 今回の登録履修のきっかけの割合（回答者人数ベース）

登録したきっかけ	割合 (%)
単位が欲しい	41.1
友人が履修している	4.0
プログラムの内容が面白そうだから	62.3
早いうちに社会と関わりを持ちたいから	45.1
自分の専門性を磨きたいから	14.9
他にやる事が無いから	2.9
その他	6.9

## 2. 最も関心があるプログラム別の学生特性

上記では今回のアンケート回答者の基本情報に基づき分析を行い、報告・説明をまとめた。以下では回答者のパーソナリティ特性、創造的態度、大学生活充実感などと最も関心のあるプログラムとの関係性について着目し、先行研究などを引用しながら分析を行った。

## 2.1 パーソナリティ特性

人間のパーソナリティ特性 (personality traits) の捉え方は多種多様である。パーソナリティは人によって多様である。その特性をどの程度有しているかによって人の性格を説明しようとする性格特性論が1980年代以降、盛んに論じられるようになった。性格特性論は、人間が思考や感情、行動の背後にある一貫した反応傾向や共通特性を持つと仮定し、その共通特性を数値化する。様々な性格に対する研究が長年行われてきて、結果として外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性という5つの特性因子(ビッグ・ファイブ)に収束される。5つの性格特性を用いた研究はその内的妥当性や外的妥当性などを含め、多くの研究や実験などで正確性が検証されている(鶴2018;小塩2020)。

本調査ではパーソナリティ特性については小塩ら(2012)が作成した日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)の10項目を使用している。TIPI-JはGoslingら(2003)が作成したTIPI日本語版であり、パーソナリティ特性の5つの次元を正負2項目、合計10項目(7件法)で構成している。これまでに、日本でよく使われているパーソナリティ特性の尺度との間で併存的妥当性が確認されており、また、2週間間隔の再検査信頼性は $r=.64 \sim .84$ の範囲であり、英語版とほぼ同様の信頼性があるという(小塩ら2012;Oshio et al., 2013)。下記表8はTIPI-Jの10項目の内容である。本調査では作成者である小塩ら(2012)が公開している尺度使用マニュアルに従い、データ収集・変数合成・得点化を行った。(尺度使用マニュアル：[https://jspp.gr.jp/doc/manual\\_TIPI-J.pdf](https://jspp.gr.jp/doc/manual_TIPI-J.pdf))

表8. 日本語版Ten Item Personality Inventory (TIPI-J)

① 活発で、外向的だと思う
② 他人に不満をもち、もめごとを起こしやすいと思う
③ しっかりしていて、自分に厳しいと思う
④ 心配性で、うろたえやすいと思う
⑤ 新しいことが好きで、変わった考えを持つと思う
⑥ ひかえめで、おとなしいと思う
⑦ 人に気をつかう、やさしい人間だと思う
⑧ だらしなく、うっかりしていると思う
⑨ 冷静で、気分が安定していると思う
⑩ 発想力に欠けた平凡な人間だと思う

最も関心があるプログラム別に5つのパーソナリティ特性がどのように異なっているのかについて一

元配置分散分析を用いて検証を行った。具体的に、まず、Welchの修正分散分析より、5%水準で有意差が見られたかどうかを確認する。次に、有意差が確認された場合、Games-Howell法により多重比較を行って、プログラムの間に有意な差が有るかどうかを確認する。紙幅の関係で、全体の結果と有意差が見られた部分だけを記述する。

①. 外向性：Welchの修正分散分析より、5%水準で有意差が見られた( $F(4,34.96) = 3.86, p < .05, \eta^2 = 0.05$ )。この結果から、プログラムの違いにより回答者の外向性に差があると言える。この結果を踏まえてGames-Howell法により多重比較を行ったところ、海外ショートプログラム( $\mu = 3.90$ )と国内ショートプログラム( $\mu = 2.97$ )の間に有意差が見られた( $p < .01$ )。

②. 協調性：Welchの修正分散分析より、5%水準で有意差が見られなかった。この結果よりプログラムの違いにより回答者の協調性に差があると言えない。

③. 勤勉性：Welchの修正分散分析より、5%水準で有意差が見られなかった。この結果よりプログラムの違いにより回答者の勤勉性に差があると言えない。

④. 開放性：Welchの修正分散分析より、5%水準で有意差が見られた( $F(4,35.30) = 4.09, p < .05, \eta^2 = 0.05$ )。この結果よりプログラムの違いにより回答者の開放性に差があると言える。この結果を踏まえてGames-Howell法により多重比較を行ったところ、産学公連携PBL( $\mu = 5.08$ )と大学連携プログラム( $\mu = 3.61$ )の間に有意差が見られた( $p < .05$ )。

⑤. 神経症傾向：Welchの修正分散分析より、5%水準で有意差が見られなかった。この結果よりプログラムの違いにより回答者の神経症傾向に差があると言えない。

上記結果をまとめると、外向性(海外SP > 国内SP)、開放性(産学公連携PBL > 大学連携)以外に、プログラム間において、他に有意な差が見られなかった。パーソナリティ特性が上記5つの因子に分類され、それぞれの因子の強弱が人によって異なるため、興味関心、振る舞いや物事の捉え方などに違いが出るとされているが、本調査ではそれほどの違いが確認されなかった。

## 2.2 創造的態度

芸術・デザイン系職種にとっては創造性がより一層求められている。そのため、芸術・デザイン系大

学生にとっては在学中に創造的態度の涵養が必要になってくる。本調査では、繁樹ら(1993)の「創造的態度」質問項目を部分的に引用している。繁樹ら(1993)の研究においては、柔軟性、分析性、進取性、持続性、想像性、協調性を「創造的態度」の下位概念としているが、本調査においては、その中の進取性と想像性を用いている。

表9. は本調査に「創造的態度」として使われている質問項目である。これらの質問項目の信頼係数  $\alpha = .76$  であるため、この10項目の質問は創造的態度として内的一貫性があり、信頼性のある概念であると認められる。最も関心があるプログラム別に創造的態度がどのように異なるのかについて一元配置分散分析を用いて検証を行った。その結果、Welchの修正分散分析より、5%水準で有意差が見られた ( $F(4,36.29) = 15.88, p < .01, \eta^2 = 0.05$ )。この結果よりプログラムの違いにより回答者の創造的態度に差があると言える。この結果を踏まえて Games-Howell 法により多重比較を行ったところ、産学公連携 PBL ( $\mu = 4.40$ ) とインターンシップ ( $\mu = 3.92$ ) の間に、産学公連携 PBL ( $\mu = 4.40$ ) と海外ショートプログラム ( $\mu = 3.90$ ) の間に、産学公連携 PBL ( $\mu = 4.40$ ) と国内ショートプログラム ( $\mu = 3.73$ ) の間に、有意差が見られた ( $p < .01$ )。この結果から、産学公連携 PBL 参加者は他のプログラム参加者より、創造的態度が有意に高いことが分かる。

表9. 創造的態度の質問項目の一覧表

① 誰も今まで考えたことの無いような素晴らしいものを創りたい
② 新しい物や珍しい物が好きだ
③ 何かを創る時、人よりも優れたものを創りたい
④ 自分のやっていることと関係ないことでも好奇心が湧く
⑤ 何でも美しいものを創りたい
⑥ やり方が分からなくても、まずやってみる
⑦ よく空想する
⑧ 現実と異なることをよく考える
⑨ 新しいことを考えつくと非常に嬉しい
⑩ 自分が人と変わっていると思う

### 2.3 大学生生活充実感

大学教育には知識の伝授のみならず、在学生の包括的な充実感を求められている。本調査では、大対(2015)の「大学生生活充実感」の質問項目を部分的に引用している。大対(2015)の研究においては交友満足、期待感、学業満足、不安を下位概念としてい

るが、本調査においても、これらの下位概念を用いている。

表10. は本調査に「大学生生活充実感」として使われている質問項目である。これらの質問項目の信頼係数  $\alpha = .77$  であるため、この10項目の質問は大学生生活充実感として内的一貫性があり、信頼性のある概念であると認められる。最も関心があるプログラム別に大学生生活充実感がどのように異なるのかについて一元配置分散分析を用いて検証を行った。その結果、Welchの修正分散分析より、5%水準で有意差が見られた ( $F(4,34.81) = 4.34, p < .05, \eta^2 = 0.05$ )。この結果よりプログラムの違いにより回答者の大学生生活充実感に差があると言える。この結果を踏まえて Games-Howell 法により多重比較を行ったところ、産学公連携 PBL ( $\mu = 3.93$ ) とインターンシップ ( $\mu = 3.33$ ) の間に、産学公連携 PBL ( $\mu = 3.93$ ) と海外ショートプログラム ( $\mu = 3.40$ ) の間に、産学公連携 PBL ( $\mu = 3.93$ ) と国内ショートプログラム ( $\mu = 3.34$ ) の間に、有意差が見られた ( $p < .05$ )。この結果から、産学公連携 PBL 参加者は他のプログラム参加者より、大学生生活充実感が有意に高いことが分かる。

表10. 大学生生活充実感の質問項目一覧表

① 学内の友人関係に満足している
② 大学で孤立感を覚えることがある
③ 大学で自分が成長できそうだ
④ 大学で学ぶことで自分を深めることが出来そうだ
⑤ 大学で積極的に取り組める物がある
⑥ 大学の授業が面白い
⑦ 大学の授業内容が予想したものと違う
⑧ 大学教員の熱意を感じる
⑨ これからの大学生生活の先が見えず不安である
⑩ 将来の進路について不安である

注：質問項目②、⑦、⑨、⑩について分析時、逆転処理をしている。

### 3. まとめ：今後のプログラム企画などへの示唆

本稿は2022年度2Q 集中プログラム参加者を対象にアンケート調査を行った。収集されたサンプルは学年分布、所属先分布、履修プログラム分布などにおいて、履修者分布にかなり近いことから、本調査サンプルの代表性が確認出来た。

次に、回答者の基本情報から、社会実践力育成プログラムに関する情報入手ルートは主にセイカー

ポータルと教員からの紹介であることが分かった。また、比較的に参加しやすい国内ショートプログラムを経験してから、より難易度の高い企業・公的機関でのインターンシップを履修したいというように、難易度を自ら上げていく傾向が見られた。それと同時に、最も関心があるプログラムを終えてからも、次回同じプログラムの履修を希望することが分かった。これは同一プログラムであっても、内容が異なる科目を履修したいという潜在的な需要が大きいことを意味する。しかしながら、2021年度以降入学生においては、現在の履修条件では同じプログラム内の科目を2回以上履修することが出来ない。今後のプログラム企画において、学生の学習機会の確保という視点から、再検討が必要になると思われる。そして、何より大部分の回答者が社会実践力育成プログラムの内容に強い関心を持ち、かつ社会と関わりたいという理由で積極的な動機で登録したことが確認出来た。

最後に、パーソナリティ特性、創造的態度、大学生活充実感と最も関心があるプログラムとの間の関係性について分散分析を行った。パーソナリティ特性においては外向性(海外SP > 国内SP)、開放性(産学公連携 PBL > 大学連携) 以外に、他に有意な差が見られなかった。創造的態度においては、産学公連携 PBL 参加者は他のプログラム参加者より、有意に高いことが確認できた。大学生生活充実感においても、他のプログラム参加者より、産学公連携 PBL 参加者のほうが有意に高いことが分かった。こういった分析結果を本プログラムの企画・運営にどう活かすかは今後の検討事項である。

本稿はあくまでも事前アンケートのデータを予備的に分析した結果である。今後、全体像をさらに把握するためにはより精緻的な分析が必要となる。また、本調査では横断的なデータで因果関係の確認が出来ていないが、事後アンケートのデータとの統合により、2時点の縦断的なデータ分析をする予定である。

**注：**

1. 第1著者：南了太；第2著者：夏世明；第3著者：中井咲貴子
2. 各プログラムの概要は京都精華大学社会実践力育成プログラム部門ホームページで詳述されている。
3. 科目を複数履修する学生もいたことに加え、連携先のコロナ対策や国際情勢などによる閉講などにより、人数実数値ベースの最終履修者は325名で

あった。

4. 初回授業でアンケート調査が実施されたプログラムもあるが、本稿ではプログラム参加前と見なす。

5. アンケート調査は対面配布と WEB 回答で実施された。なお、本調査は京都精華大学「人を対象とする研究倫理審査委員会」にて承認を受けた。

**参考文献：**

鶴光太郎『性格スキル：人生を決める5つの能力』祥伝社、2018。

小塩真司『性格とは何か—より良く生きるための心理学—』中公新書、2020。

小塩真司, 阿部晋吾, Pino Cutrone「日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み」『パーソナリティ研究』21 (1), pp.40-52, 2012。

Oshio, A., Abe, S., Cutrone, P., & Gosling, S. D, Big Five content representation of the Japanese version of the Ten-Item Personality Inventory. *Psychology*, 4 (12), pp.924-929, 2013.

繁榊算男, 横山明子, スターン・サム, 駒崎久明「日米学生の創造的態度の因子分析による比較研究」『心理学研究』64 (3), pp.181-190, 1993。

大対香奈子「大学生生活充実感を規定する要因の検討」『近畿大学総合社会学部紀要』4 (1), pp.47-57, 2015。